

映画の脚本があってキャスティングをするとき、まず映画の風景に立ったその俳優の姿を想像します。たとえば薄汚れた衣装を着たその俳優が雪と泥の荒野に立っている。その姿が成立するのか。あるいは粉塵まみれの中、電動ブレーカーでコンクリートを打つ姿でもいいし、仕事場兼住居で仕事の依頼を受ける姿でもいい。

大好きな写真のひとつにジム・ブランデンバーグという写真家が撮った白オオカミの写真があります。一匹のオオカミが正面を見据え、こちらを見つめています。その視線は一切の同情を拒んでいるように感じさせられます。大地からスクッと伸びた4本の脚からは厳しい大自然の中でさえ、生き抜くことを忘れない気高さを思わせ、汚れた白い毛からはいずれこの自然の中で死んでいくことを受け入れている覚悟を思わせます。

映画の俳優はまず自分そのものを人前に持ち出さなければなりません。肉体、骨格、筋肉、声、動作、これらのものは他の誰とも同じではありません。自分だけのものです。それから自分がなにを想うかということ。時代、場所を含めた生育環境の違い、性格などから、これらも他の誰とも交わらないものです。

俳優という職業は、与えられた役を他の誰とも違う自らの肉体を通して自らの解釈で自らの想いを表出していくことになる。結果として取り換えがきかないということになります。

だから自分ではない人を演じながら、限りなく自分自身を見つめ、再発見し、それを認めてあげなくてははいけません。

これらのことは自分が意図したこととして、同時に意図しないものとして、映画に映りこんできます。とても恐ろしくて楽しいことです。でもそれが自身と財産になります。

才能とは決して突出した何かではなく、どうしても他の人と交わらない自分自身とっていいでしょう。

一匹のオオカミのように立って欲しい。その立ち姿から自分自身であることの気高さと、あきらめを感じたい。そして忘れてはならないのはオオカミにとっての大自然であるような、自分ではどうしようもできない大きななにかがあるにもかかわらず、自分の脚でスクッと立つ力。生き抜く力が必要です。俳優は誰かが信じていることを信じるのではなく、自分を信じなければならぬ孤独な作業ですから。

今回のワークショップではあらかじめ脚本を用意し、実践的な形式を取っていかうと思っています。映画監督と俳優という立場を取りながら個個人と向き合い、まずは各々が自分を再発見できるきっかけになればいい。さらに人に見せるものまで高めていければいいですね。